

物語を読むおもしろさを味わう児童を育てる中学年国語科学習指導

－読みの観点別カードを活用したことば発見交流を通して－

教育指導部教科教育班 長期派遣研修員（柳川市立矢留小学校 教諭） 松中 好江

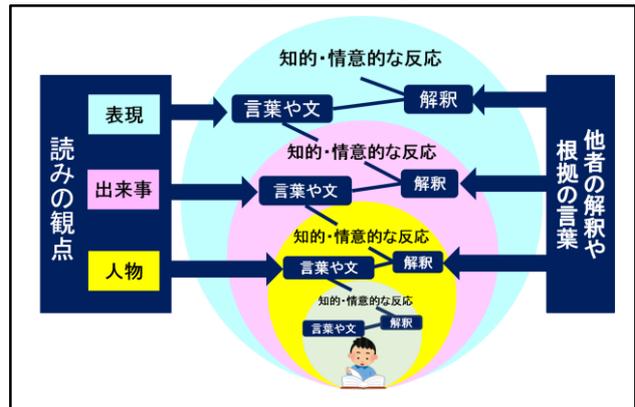
1 研究主題についての説明

(1) 研究主題の意味

ア 主題について

「物語を読むおもしろさ」とは、物語を読んでいく中で、考えたり心を動かしたりする知的・情意的な反応が繰り返され、変化していくことである。読者は、言葉や文を関係付けて解釈を行い、物語の人物や出来事、場面が展開する像を描く。そして、想像の体験を楽しみ、知的・情意的な反応を繰り返していく。その反応が大きくなるように、作者は、「時・場・人物の設定」をし、「出来事の中で起こる人物や状況の変化」を描き、言葉の使い方や構造、伏線などの「表現の工夫」を行っている。読者は、これらに着目して読んでいくことで、どんな人物が、どんな出来事によって、どう変化し、それらがどのように描かれているのかということが少しずつ明確になり、物語を読むおもしろさへとつながっていく。よって、この三つを、物語を読むおもしろさを感じさせる「読みの観点」とする。

「物語を読むおもしろさを味わう児童」とは、物語を読むことを通して、知的・情意的な反応を繰り返し、反応の変化を自覚し、表出する児童のことである（図1）。児童は、物語を初めて読んだときに曖昧な像を自分の頭に描き、知的・情意的に反応する。「読みの観点」を基に読むことにより、人物や出来事、場面の展開のつながりに着目し、解釈を通して具体的な像へと変化させ、新たに知的・情意的に反応する。また、他者の解釈やその根拠の言葉を知ることにより、言葉や文の関係に気付いたり関係付けを見直したりしながら、解釈を強化、付加、修正し、深めていくことで、さらに反応する。そして、振り返ることで、自らの変容を自覚し、表出していく。



そこで、本研究で目指す児童を次の二つの姿と捉える。 図1 物語を読むおもしろさを味わう児童

- 自分の解釈を明確にし、深めていくために、意欲的に文章を読み、互いに考えや根拠、解釈を聞き合ったり話し合ったりする児童 【関心・意欲・態度】
- 時・場・人物の設定、出来事の中で起こる人物や状況の変化、表現の工夫に着目して、言葉や文を関係付けながら解釈を行い、知的・情意的な反応の変化を自覚し、表出できる児童 【読むこと】

イ 副題について

「読みの観点別カード」とは、学習の課題に対する自分の考えや根拠の言葉を書くカードのことである（図2）。「読みの観点」を意識させるために、カードの色を人物（黄）、出来事（ピンク）、表現（青）にする。カードの①には学習の課題に対する自分の考えを書かせ、②には根拠となる言葉を書かせる。そして、交流において友達のと根拠の言葉や解釈を聞き、聞いた考えを③に、見直した自分の考えを④に、根拠の言葉を⑤の箇所に書き込ませる。この過程を複数回行い、自分の考えや感想の変化を見ることができるようになっている。

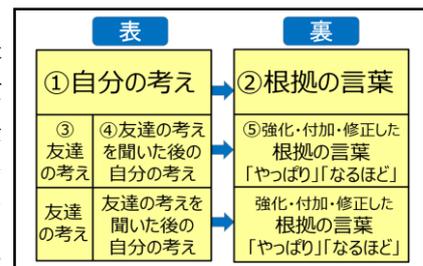


図2 読みの観点別カード

「ことば発見交流」とは、自分の解釈を明確にし、深めるために行う話し合いのことである。本研究では「ことば発見ペア交流」と「ことば発見みんなで交流」の二つの交流を位置付ける。

「ことば発見ペア交流」は、解釈を明確にするために行う。児童は、学習の課題に対する自分の考えを見直すために、読みの観点別カードを持って移動し、友達の考えやその根拠の言葉と解釈を聞き合う。そして、自分の考えを見直し、自分の考えの変化を記録する。この活動を繰り返し、自分の解釈を強化、付加、修正させて明確にしていく。

「ことば発見みんなで交流」は、解釈を深めるために行う。読みの観点別カードに書いた考えを出し合う中で、児童が気付いていない言葉や、解釈が曖昧な点に教師が発問によって目を向けさせる。そして、全体で話し合うことにより解釈を深めていく。

(2) 主題設定の理由

グローバル化が進む現代社会では、創造する力やコミュニケーション能力の向上の必要性が叫ばれている。学校教育においても、様々な人と協働しながら新しいものを創造する力の育成が求められている。文学的文章の学習指導では、児童に物語を読むことを通して、他者である登場人物の視点に立たせるとともに、他の児童と物語の世界を楽しみながら創造させることができる。しかし、実際の授業においては、教師の解釈を学習のゴールに位置付けて、教師の誘導的な授業が行われていることが少なくない。以上のことから、物語を読み、他者の考えや感想を推測しながら聞いたり、話し合ったりすることによって、自分の考えや感想を見直し、その変化を自覚し、表出していく学習を行う本研究は意義あるものとする。

2 研究の目標

小学校国語科第3学年「読むこと」の物語の学習指導において、物語を読むおもしろさを味わう児童を育てるために、読みの観点別カードを活用し、解釈を明確にし、深めさせるための「ことば発見交流」を位置付けた学習の具体化と有効性を究明する。

3 研究の仮説

小学校国語科第3学年「読むこと」の学習において、読みの観点別カードを活用した「ことば発見交流」を単元に位置付け、具体的な支援を行えば、「関心・意欲・態度」や「読むこと」に関する力が高まり、物語を読むおもしろさを味わう児童が育つであろう。

4 研究の具体的構想

(1) 具体的な手立て

ア 学習の課題の工夫

学習の課題の設定においては、まず、教師が読みの観点から教材を読んで、児童の解釈が曖昧になったり、解釈が複数出てきたりするような言葉や文に着目する。その点について考えさせることで、児童の曖昧な解釈が明確になったり、物語の全体像が見えてきたりするものを学習の課題とする。また、全員の児童が自分の考えをもち、その違いから課題を解決していこうとする意識を高めるために、考えを選択できるようにする。

イ ことば発見ペア交流の工夫

(7) 形態の工夫

児童に主体的に自分の考えを見直させるために、交流の前に、だれがどの考えなのかを明らかにして、聞き合いたい児童のところへ移動し、ペアをつくらせるようにする。

(4) 読みの観点別カードを活用した交流のモデル

根拠の言葉を基にした考えを意識させるために、ペアをつくった相手と、交流のモデル(図4)を参考にして、考え、根拠の言葉、解釈の順に聞き合わせる。まず、**A**は相手のカードの表に書かれた

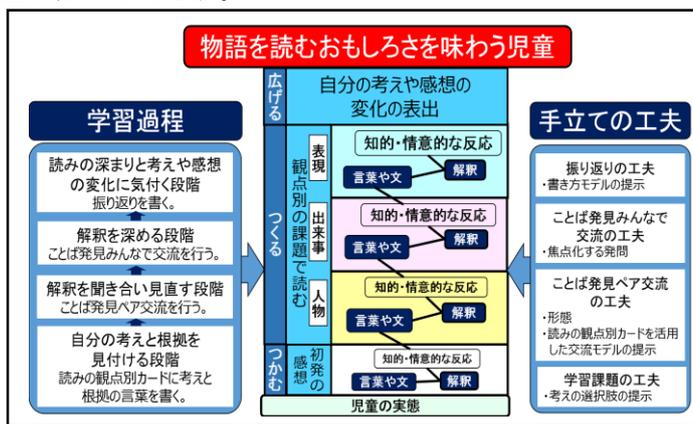


図3 研究構想図

考えだけを見て、その根拠となった言葉を推測しながら尋ね、それにBが答えるようにする。そうすることにより、Aは、相手の立場になって考え、自分の考えと比べることができる。次に、根拠の言葉を基に、Aから解釈を尋ねられることにより、Bの頭の中が整理され、カードに書いていない解釈を詳しく話し始める。そして、ことば発見ペア交流を行った後は、自分の考えを見直し、その変容が自覚できるように、考えが強化された場合には「やっぱり」を、付加、修正された場合には「なるほど」をカードに書かせるようにする。

ウ ことば発見みんなで交流における発問の工夫

解釈を深めるために、児童だけでは気付けない言葉の関係付けや解釈の曖昧な部分に焦点化する発問を行う。

エ 振り返りの位置付け

解釈の深まりと自分の考えや感想の変化を自覚させ、表出させるために、学習の終末に振り返りを位置付ける。書き方モデルの提示をすることで、学習を振り返り、自分の考えや感想の変化とその根拠や解釈を整理して書くことができるようにする。児童が書いた文章は、学習の後で教師が作成する「国語新聞」で取り上げ、次時に紹介することで、友達の考えや書き方のよさを参考にさせる。

5 研究の実際

(1) 実証授業の学年及び単元

第3学年 感想を伝え合おう 「サーカスのライオン」(東京書籍3年下)

(2) 単元目標

- 自分の解釈を明確にし、深めるために、人物や出来事、表現に着目しながら文章を読み、互いの考えや根拠、解釈を聞き合ったり話し合ったりする態度を育てる。 【関心・意欲・態度】
- 人物の設定や、出来事によるじんごの気持ちの変化、じんごの行動や最後のサーカスの様子を想像させる表現の工夫について、言葉や文を関係付けながら解釈を行い、自分の考えや感想の変化を自覚し、表出することができるようにする。 【読むこと(1)ーウ】

(3) 単元指導計画(総時間数9時間)

段階	学習活動	主な手立て	目指す児童の姿
つかむ (3)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 初発の感想を書いて、交流する。 ○ 読みの観点から物語を見つめ、学習の見通しをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ペアや全体での交流 ○ 読みの観点に沿った感想の分類 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 初発の感想とその理由を書いている。 ○ 学習の見通しを書いている。
つくる (4)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 読みの観点ごとに読み進める。(学習の課題) 人物・じんごの毎日の生活は楽しいのか。 出来事・男の子の行動で、男の子に対するじんごの気持ちを一番強く変えたのはどの日か。 表現・じんごの力強さはどれくらいか。 ・じんごのいないサーカスの場面を読んでどんな心になるのか。 ○ 振り返りを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の課題の工夫 ・読みの観点ごとに設定 ・考えの選択肢の提示 ○ 読みの観点別カード ○ ことば発見交流の工夫 ・ペア交流モデルの提示 ・焦点化させる発問 ○ 振り返りの位置付け ・書き方モデルの提示 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 読みの観点別カードに自分の考えと根拠を書いている。 ○ ペアや全体で考えや根拠、解釈を聞き合ったり話し合ったりして、自分の解釈を見直している。 ○ 振り返りに自分の考えや感想の変化と深まった解釈を書いている。
広げる (2)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観点ごとに内容を整理し、自分の考えや感想の変化、おすすめポイントを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 作成物モデルの提示 ○ 学習の流れの揭示 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の考えや感想の変化と解釈を書いている。

(4) 指導の実際と考察

ア つかむ段階(1/9～3/9時)

この段階では、初発の感想を書かせ、それを基に学習の見通しをもたせることをねらいとする。児童は、教師の読み聞かせを聞き、初発の感想とその理由を書いた。それをペアで聞き合った後、学習の課題に関わる四人の感想を教師が選び、発表させた。学級全員で自分の感想を発表しながら似ている内容に分類し、読みの観点のどれに当てはまるのかを話し合った。どの観点から読んでいくのかは教師が設定した。以上のような活動を行い、単元の学習の見通しをもつことができた。

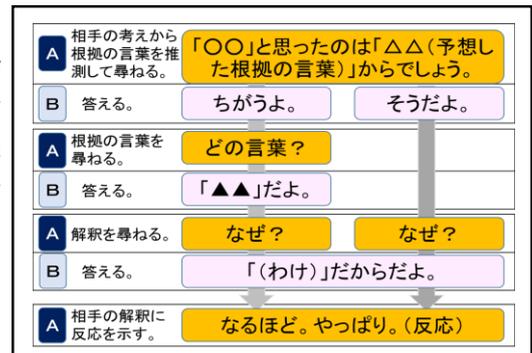


図4 ことば発見ペア交流のモデル

イ つくる段階（4/9～7/9時）

この段階では、学習の課題に沿って解釈を深めさせ、自分の考えや感想の変化を自覚し、表出できるようにすることをねらいとする。ここでは、男の子と出会ってからのじんざの変化について考えた時間（5/9時）について述べる。

○ ねらい

- ・物語の出来事に着目しながら意欲的に文章を読み、自分の解釈を見直すために、考えや根拠、解釈を聞き合ったり話し合ったりする態度を育てる。 【関心・意欲・態度】
- ・じんざの行動や会話文に着目し、男の子との出会いによるじんざの気持ちの変化を捉え、読みの深まりや考えの変化を自覚し、表出することができるようにする。 【読むこと(1)－ウ】

【学習の課題の工夫と読みの観点別カードの活用】

自分の考えと根拠を見付けさせるために、学習の課題を「男の子の行動で、男の子に対するじんざの気持ちを一番強く変えたのはどの日か」とし、自分の考えを、A「さんぽに出かけた夜」、B「次の日」、C「毎日」、D「サーカスが終わる前の日」から選ばせた。この課題は、A、B、C、Dのどれか一つの答えに絞ることをねらうためのものではない。物語の内容では、それを明確に限定できないからである。このような課題にしたのは、それぞれが考えたじんざの気持ちを話し合わせることで、気持ちの変化を捉えさせ、その変容が男の子との関わりからもたらされていることを関係付けて考えさせるためである。学習の課題に対して、全員の児童が、読みの観点別カードに根拠の言葉と自分の考えを書くことができた。これは、学習の課題を焦点化し、自分の考えを選ばせたことと、自分の考えと根拠の言葉を明確にして書くカードの形式が有効だったと考える。

【読みの観点別カードを活用したことば発見ペア交流】

<p>B児：Aと思ったのは、「ぐぐっとむねのあたりがあつくなった」からでしょう。 A児：そうだよ。 B児：なぜその言葉からAだと思ったの。 A児：<u>「お見舞いに来た」と言ってくれて嬉しかったからだよ。</u>① B児：なるほどね。でもやっぱり私はDと思うな。</p>		<p>A児：Dと思ったのは、「力がこもった」の言葉からでしょう。 B児：そうだよ。 A児：なぜその言葉からDだと思ったの。 B児：<u>だって、「力がこもった」のは、やる気が出ているからだよ。</u>② A児：分かったよ。でも、やっぱりAだな。</p>	
A児の考え		B児の考え	
A	ぐぐっとむねのあたりがあつくなった。	D	・じんざの体に力がこもった。 ・目がひかっと光った。 ・「ふいふい、あしたわしはわかいとさのように、火の輪を五つにしてくぐりぬけてやろう。」
D	やっぱり A	D	やっぱり D
B児の考え	やっぱり③ A	A児の考え	やっぱり⑤ D
D	なるほど D⑥ ぐぐっとむねのあたりがあつくなった。	A	なるほど④ ぐぐっとむねのあたりがあつくなった。 やっぱり⑤ 力がこもった。目が光った。ふいふい。
	なるほど 火の輪を五つ⑥		

資料1 A児とB児のことば発見ペア交流

解釈を聞き合い見直させるために、ことば発見ペア交流を行った。資料1及び2は、交流におけるやりとりの様子と読みの観点別カードの記述内容である。A児とB児の交流では、根拠の言葉を基に解釈を話すことができている（波線①、②）。A児は、男の子の言葉と関係付けてじんざの気持ちを想像している（波線①）。相手の根拠の言葉と解釈を基に自分の考えを見直し、A児は「やっぱり」（③）と自分の考えを強化している。B児は、相手の根拠の言葉と解釈を聞いて「なるほど」（④）と思っている



資料2 ことば発見ペア交流の様子

が、自分の考えと比べて「やっぱり」(⑤)自分の考えが強いと判断している。さらにA児は、ペアを変え、「火の輪を五つ」という根拠の言葉や「男の子に見せたかったから」という解釈を聞き、前に聞いたB児の考えと関係付けて「なるほど」と思い、自分の考えを修正している(⑥)。このように、全員の児童が、意欲的に移動しながらペアで聞き合い、自分の考えを見直すことができた。これは、読みの観点別カードを使ったことば発見ペア交流のモデル提示が有効であったからだと考える。

【ことば発見みんなで交流における発問の工夫】

解釈を深めさせるために、ことば発見みんなで交流を行った。まず、AからDの根拠の言葉を発表させ、その後、解釈について尋ねた。すると、予想していたとおり、児童は、男の子がじんざにとって特別な存在だとは意識していない様子だったので、教師が「男の子は他のお客とどう違うの」と発問した。そこでのやりとりの内容は資料3である。C1、C2は、他のお客と男の子の行動を比較して解釈を行った。B児は、ペア交流でのA児の考えを参考にした発言を行った。しかし、C3は、チョコレートを受け取るじんざの気持ちについて曖昧な解釈であった。そこで、「チョコレートをくれるからなの」と問うと、C4、C5は、「毎日」や「男の子が来てくれた」ことを根拠に挙げ、C6は、前の場面のじんざの人物設定と関係付けた解釈を行った。さらに解釈を深めるために、「毎日来てくれることとチョコレートをもらうことはどっちが嬉しいの」と発問した。ペア交流によって、じんざが継続的な男の子とのふれ合いに喜びを感じたと解釈を変化させたA児は、「毎日」と発言した。C7は、前の場面のじんざの気持ちと比べ、C8は、さらに別の根拠の言葉を挙げ、じんざが変わった理由を捉えていた。このように、じんざの変化を男の子との関わりから明確にすることができたのは、発問によって他のお客を意識させるといった新たな視点を与え、比較させたことが有効であったからだと考える。

T：じんざが嬉しくなったのはわかったけど、もっとはっきりさせよう。サーカスが好きなお客はたくさんいるけど、男の子は他のお客とどう違うの。
 C1：男の子だけ心配してくれています。
 C2：他のお客はサーカスには来るけれどじんざのところには来ていません。
 B児：お見舞いや、毎日来て来ています。
 C3：チョコレートをお願いします。
 T：チョコレートをくれるからなの。
 C4：違います。「毎日」チョコレートを分けてくれるからです。
 C5：「男の子が来てくれた」から楽しくなったと思います。
 C6：同じです。前のじんざは、毎日退屈だったけど、男の子が毎日来て来て楽しくなったからです。
 T：毎日来てくれることとチョコレートをもらうことはどっちが嬉しいの。
 A児：毎日。心配してくれたからです。
 C7：同じです。前は暇だったけど、男の子が来て来て楽しくなりました。
 C8：付け加えます。毎日来て来て嬉しくて、「火の輪を五つ」にして元氣を見せたいと思ったと思います。

資料3 ことば発見みんなで交流

【振り返りの位置付け】

自分の考えの変化の過程を振り返る部分と深まった解釈を書く部分で構成された書き方モデルを提示し、振り返りを書かせた(資料4、5)。A児、B児ともに、自分の考えの変化を自覚した文章を書いた(実線①)。また、A児は、交流を通して自分の根拠の言葉と解釈について明確になったことを言語化した(実線②)。B児は、AからDのじんざの気持ちの変化のつ

ふり返り
 ①
 ②
 ③
 ④
 ⑤
 ⑥
 ⑦
 ⑧
 ⑨
 ⑩
 ⑪
 ⑫
 ⑬
 ⑭
 ⑮
 ⑯
 ⑰
 ⑱
 ⑲
 ⑳
 ㉑
 ㉒
 ㉓
 ㉔
 ㉕
 ㉖
 ㉗
 ㉘
 ㉙
 ㉚
 ㉛
 ㉜
 ㉝
 ㉞
 ㉟
 ㊱
 ㊲
 ㊳
 ㊴
 ㊵
 ㊶
 ㊷
 ㊸
 ㊹
 ㊺
 ㊻
 ㊼
 ㊽
 ㊾
 ㊿

資料4 A児の振り返り

ふり返り
 ①
 ②
 ③
 ④
 ⑤
 ⑥
 ⑦
 ⑧
 ⑨
 ⑩
 ⑪
 ⑫
 ⑬
 ⑭
 ⑮
 ⑯
 ⑰
 ⑱
 ⑲
 ⑳
 ㉑
 ㉒
 ㉓
 ㉔
 ㉕
 ㉖
 ㉗
 ㉘
 ㉙
 ㉚
 ㉛
 ㉜
 ㉝
 ㉞
 ㉟
 ㊱
 ㊲
 ㊳
 ㊴
 ㊵
 ㊶
 ㊷
 ㊸
 ㊹
 ㊺
 ㊻
 ㊼
 ㊽
 ㊾
 ㊿

資料5 B児の振り返り

ながりを言語化した(実線③)。このように、全員の児童が自分の解釈の過程や自分の考えの変化を自覚し、表出することができたのは、学習を振り返らせる書き方モデルの提示が有効であったからだと考える。

ウ 広げる段階（8／9～9／9時）

この段階では、学習のまとめとして、自分の考えや感想の変化を表出させることをねらいとする。児童は、人物、出来事、表現で読んできた学習を振り返りながら、読みの深まり、自分の考えや感想の変化、読みの観点で読むよさをリーフレットに書き、発表することができた。

(5) 全体考察

目指す児童の姿を、読みの観点別カード、振り返りの記述及び授業後のアンケートから分析する。

ア 「関心・意欲・態度」について

実証授業を通して、交流に対する意識の変容が見られた。ことば発見ペア交流において、自分の考えを見直すために、同じ考えや違う考えの根拠や解釈を聞こうと、カードに自分で枠を設け、2回以上行っている児童は23人中19人いた。図5からも、交流を通して自分の考えや感想を見直したり、他者の根拠や解釈を取り入れたりしようという意識が高まっていることが分かる。「友達の証拠の言葉を聞いたら、証拠の言葉が増えて考えが強くなる」や「なるほどと納得して考えが変わる」という記述から、根拠を基にした解釈を聞き合うよさを実感していることが分かる。これは、読みの観点別カードを使って、根拠の言葉と解釈を聞き、自分の考えを見直すことば発見交流を位置付けたことが有効であったからだと考える。

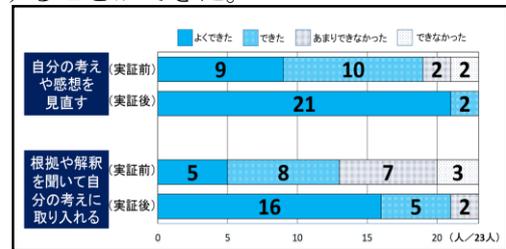


図5 交流に対する意識アンケート

イ 「読むこと」について

児童が書いた読みの観点別カードや振り返りの記述から分析を行ったところ、根拠の言葉を挙げて解釈を述べたり、場面や文を関係付けて解釈を行ったりすることができた児童が増えた（図6）。振り返りの文章には、全員の児童が自分の考えや感想の変化の過程とその理由となる解釈を記述していた。これは、ことば発見交流において、根拠の言葉と解釈を明確に分けた聞き合い方や、言葉や場面を関係付けるための教師の発問が有効であったからだと考える。さらに、学習後のアンケートから「読みの観点」に着目して読もうとする児童が増えたことが分かる（図7）。「『人物』で読むと、始めと終わりでどう変わったのかよく分かる。」「『出来事』で読むと、なぜ人物が変わったのか分かる。」「『表現』で読むと、場面の様子や人物の気持ちが詳しく分かる。」という記述が見られた。「読みの観点」で読むことで、自分の考えや感想が変化していくという、物語を読むおもしろさを味わっていることが分かる。これは、読みの観点に沿った学習の課題を設定し、読みの観点別カードを活用して学習を進めていったからだと考える。

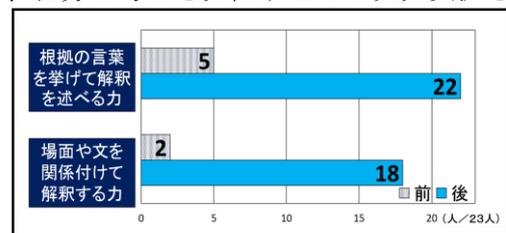


図6 「読むこと」における分析

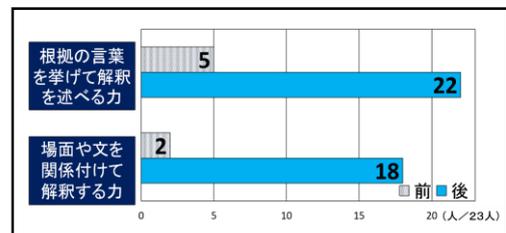


図7 「読むこと」に関するアンケート

しかし、「人物」「出来事」「表現」の学習の課題の順序については教師が設定したので、児童にこの順序で読んでいく必然性を気付かせるまでには至っていない。

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 読みの観点別カードを活用したことば発見交流を位置付けたことにより、児童は、自分の考えや感想を見直し、解釈の深まりを意識することができた。これは、児童が、知的・情意的な反応を繰り返し、反応の変化を自覚し、表出するために有効だったと考える。

(2) 今後の課題

- 物語を「人物」「出来事」「表現」の順序で読むことを意識させるために、「つかむ段階」において、簡単な物語を使って考えさせるなどの手立ての工夫を検討していく。

<参考文献>

- ・ 田近 洵一(1996) 『創造の<読み>-読書行為をひらく文学の授業-』 東洋館出版社